

一般社団法人 奈良県建築士会は、建築士法にもとづき、建築士の社会的地位の向上と建築文化の進展並びに建築の専門家としての社会貢献などを目的として、昭和26年11月に設立されました。行政や各種団体と連携を図りながら、職能を活かして、地域に根付いた活動を進めています。

近年、建築に関係するものでも、人口減少や住宅の老朽化による空き家の増加、毎年、発生する水害や地震の被害の増大、高齢化の進展、既存ストックとしての歴史的建築物の活用、景観の問題などが挙げられます。これらの問題について、活動を進めていきたいと考えています。(ホームページより抜粋)

建築士をはじめ、ゼネコン・中小工務店から、都市計画の専門家等、あらゆる業種の優秀な会員が集まっています。

情報誌「士会奈良」の表紙は「奈良の駅シリーズ」として万葉まほろば線の駅舎を連載されています。明治時代に建設された駅舎の魅力を再発見していただき、駅舎のデザイン上の発見・再発見、駅舎の活用、駅を基点としたまちづくりを紹介している。

今回、天理駅を取り上げられた。

◎天理駅の沿革

明治31年：奈良鉄道の丹波市駅として開業

明治38年：関西鉄道の駅舎となる

大正4年：天理軽便鉄道（現近鉄）の天理駅開業

昭和40年：国鉄線高架化で駅移転。天理駅に改称し近鉄と駅統合。(右写真 旧国鉄天理市駅)

◎天理駅前広場 2017年「コフファン」完成(古墳からデザイン)主構造物はプレキャストコンクリート(PC)造を紹介。

奈良の駅 シリーズ Vol.04

SHIKAI NARA 2024 NARA

1月号 VOL.536

天理市・天理駅の歴史

天理市は昭和29年山辺郡丹波市町・朝和村・福住村・二階堂村・添上郡櫻木町・磯城郡柳本町が合併して発足。天理教の名を冠した宗教都市である。天理駅は天理市中心部に位置する。

天理駅のホームは2階建て。4ホームの内2ホームは天理教の団体専用ホームとなっている。現在の駅舎は昭和40年に区画整理事業にともない統合移転したものであり、それ以前は線路が現在位置から東へ100mほどのところを南北に走っており、当初の駅舎は現在の天理市民会館の位置にあった。築物と線路線とを思わせる部分には旧町付近に始まり、歩いてみると途中に当初と思われるレンガ積みの構造物を見ることができ、北大路通りをさらに北上し旧町付の現在がブティック工場があるあたりで合流していたようである。

面白いのは旧線路の合流地点で線路を向かってみると急カーブしており、ここから新路線を曲げていったのだという歴史を感じることができ、元々別々であった日本国鉄線と近畿日本鉄道の天理駅が統合されて新しい天理駅が設置された経緯から、地元では「天理統合駅」とも呼ばれており、天理総合駅前交差点の一部の機能にもこの名が用いられている。駅の西側の旧丹波の庄屋公衆には往年の気象観測所跡が静態保存されている。

天理駅前広場

2017年に現在の新しい駅前広場「コフファン」が完成した。天理市には約1800基の古墳が残り、佐藤オキキ氏らnendo デザインは古墳の魅力を高めながら現代に響かせるランドスケープを作ること、山々に囲まれた奈良盆地の地理的特徴を表現したい。主構造物はプレキャストコンクリート(PC)造、放射状の38分割されたPC部材を現場において圧着接合している。広場内には総合案内所、カフェレストラフ、ショップ、遊具、屋外ステージが備えられている。

広場の名称「コフファン」は、デザインの主要モチーフである「古墳」と、「ファン」(扇)とを思わせ異彩を散りたくくなるような地景を提供したいという思いから、天理市長が「ファン」と地景に実際に自轉できるような場所となって欲しいことから付けられたもの。

その思いの通り、地域の各行事やイベントの場として、子供たちの遊びの場として大に活用されて残されている。特にトランポリンは大人気でオープン期間中は常に子供たちが飛び跳ねており、活気を盛りかせてくれる。【記：住まいまちづくり委員会 平川勝久】

■SHIKAI NARA 2024, 01



当初の天理駅の様子
昭和40年(1965)旧国鉄天理市駅構内・国鉄天理本通り跨線橋から
写真提供：西田博嘉氏